

会議録

会議の名称	令和7年度 第2回西東京市地域コミュニティあり方検討委員会
開催日時	令和7年8月25日（月曜日） 午後6時30分から午後8時30分まで
開催場所	田無庁舎3階 会議室
出席者	委員：渡邊委員長、小松真弓副委員長、小松哲郎委員、神崎委員、石井委員、菊池委員、菅原委員 事務局：河野課長、古川課長補佐、平沼主任、村田主事
議題	1 地域コミュニティのあり方について 2 自治会・町内会等支援のあり方について
会議資料	資料1 西東京市地域コミュニティあり方検討委員会について 資料2 西東京市自治会・町内会分布図 資料3 令和7年度 自治会・町内会等の活動に関するアンケート集計結果について 参考 菊池委員から各委員への質問 参考 地域福祉計画・地域福祉活動計画策定に伴う地区懇談会実施報告書 参考 第5期西東京市地域福祉計画策定のための調査報告書
記録方法	☐ 全文記録 ☐ 発言者の発言内容ごとの要点記録 ☒ 会議内容の要点記録

会議内容

【以下、渡邊委員長にて議事進行】

1 開会

- ・事務局にて「令和7年度 第1回西東京市地域コミュニティあり方検討委員会（案）」を作成し配布。
- ・委員より異論がなかったため、正式な会議録とすることで全会一致。

2 菊池委員から各委員への質問への回答について

○委員

- ・別のコミュニティで出会った方にオンラインで相談したが、途中から有料になった。
- ・地域に根差していない状態だと、学び方、誰にどう頼ればいいのか分らなかった。
- ・地域に関わり動いている人がいて、自分たちは支えられ、守られているのに、直接的な繋がりを持てないのが寂しく感じた。
- ・「生産者の顔が見える野菜」ではないが、誰がどんなことをやっているのかが分かると良い。

○委員長

- ・西東京市に住んでいない学生もいるので、地域の方から声をかけてほしい。
- ・「学生を活用しよう」、「学生の力を借りよう」というよりも、イベントなどを一緒に作って共に悩む時間を大切にすることが学生も当事者意識を持てて、地域の中に入っていくうえでは大切だと思う。

○副委員長

- ・団体の皆さんは混ざりたい人もいれば、混ざりたくない人もいる。
- ・混ざることを強制するのではないが、混ざってよかったという人が増えれば、自分も混ざってみたいと思う人が増えるのではないかと思う。
- ・繋ぎ役となる人も重要。

○委員

- ・参加団体の代表が変わると定例会に来なくなってしまうこともあるが、それでも継続して案内を出し続けることが大切。
- ・柔軟性をもって会を進めることが続けるためには大切。

○委員

- ・自治会活動で残るものとして、回覧板と年会費の集金はアナログで続けていきたいと思う。
- ・回覧板を回したり、年会費を集めに行ったりすると、入院中や空き家になってしまっているなどの家の情報が集まり、繋がりに繋がっている。
- ・公式LINEもやっているが、3割程度しか登録しておらず、完全なデジタル化ができないのも自治会かもしれない。

○委員

- ・本来の業務ではないので、事務員には手が空いていれば親切にするように伝えているので、関わり方は事務員によりまちまちである。
- ・スマホであれば、ご家族などの契約した方がいるはずなので、その方と分かりやすく管理をするように伝えている。

3【議題】地域コミュニティのあり方について

○事務局 資料1を用いて説明。

○委員長

- ・事務局の説明を受けて、追加した方が良いものやご意見をいただきたい。

○副委員長

- ・子どもの頃おもしろい大人がたくさんいたり、自分を大切にしてくれたりした原体験があると子どもが大人になったときにその地域に戻ってきてもくれると思う。
- ・特別な何かではなくても、子どもの頃から地域と関わって、お祭りやイベントで自分が楽しかったり、大人が真剣に自分たちのためにやってくれておもしろいなと思ってもらえたら、長い目で見ると地域へ戻ってきてもくれることに繋がるのではないかな。

○委員

- ・ずっと西東京市に住んでいるので、転入してきた方とどこで混ざれるのか、関わり方が難しかった。
- ・西東京市では年間1万人程度の転出入があり、どうしたら住みやすい街になるのかというのは大切だと思う。

○委員

- ・転入してきた側としては、引き入れようと思ってくださる方が近くにいと嬉しい。
- ・ちょうど転入時期がコロナ禍だったこともあり、引き入れづらい状況であったと思う。
- ・同じ子育て世代であっても迷惑をかけたくないため混ざりたくないと思う方も多く、お互い様で助け合うという気持ちよりも迷惑をかけたくないという気持ちが強いのかと思う。

○委員

- ・迷惑をかけてはいけないと育てられても、高齢者になってもそう思ってしまい、頼り方や制度の使い方を知らないままになってしまい、最終的には本人も家族も大変になってしまう。

○委員

- ・自分の時代は子どもの頃は学校は休んではいけないものだったが、今は辛かったら休んでもいい時代になっている。
- ・人に頼ってはいけない社会で育つと、助けてもらいたいときも自分ひとりでなんとかしようとしてしまい、閉じこもってしまう。
- ・自治会でも回覧板を回せないというだけでやめてしまう人がいて、役員を頼ってくれていいのにはと思うが気持ちが伝わらない。

○委員

- ・コミュニティセンターの地域祭りでは中学生ボランティアに手伝ってもらっているが、比較的高齢者の多い実行委員会の中でも中学生がお客さんではなく主催者の一員として仕事ができるように、受け入れ側も体制を変えていきたいと思いますという意見が出てきている。
- ・一歩進んできたイメージがするので、これが世代間の交流に繋がっていけばいい。

○委員

- ・時間が経って改めてコロナ禍の影響は大きく、コミュニティは戻っていないところもあると感じる。
- ・未だ集団で集まる場所に遊びに行かせることに抵抗がある方がいる。
- ・PTAと学校の距離も感じる。

○副委員長

- ・もう一度コミュニティの定義について整理した方が良いのではないかと。

○事務局 資料1を用いてコミュニティの分類について説明。

○委員

- ・自治会に新しい人が入らない理由として、地縁で繋がるというのが古く、しがらみが強いので若い世代に嫌われる。
- ・ネイバーフッド・コミュニティのような気の合う仲間で好きに繋がったり、助け合ったりする新しいコミュニティの方に若い世代がいてしまうのは仕方がないことだとは思う。

○委員長

- ・同じ地域に住むことで生まれる縁というのは幅広く、テーマ型コミュニティが展開されたり、タスクフォース型コミュニティが展開されたり、ネイバーフッド・コミュニティが展開されたり、その蓄積されたものが物理的コミュニティに還元されていくこともあるのかと感じた。

○副委員長

- ・居心地の良さは人それぞれなので、ネイバーフッド・コミュニティと地縁型コミュニティと見方を変えたら同じなのではないかと。

○委員

- ・自治会の手伝わなくてはならない、会費を払わなくてはならない、班長をやらなくてはならないなどが嫌というのはどうしようもない。
- ・硬い組織ではないが固定観念で、若い世代は縛られる感覚を持ってしまうのではないかと。
- ・そういうものではないということを発信する必要がある。

○委員

- ・自治会の個人情報はどうなっているのか。

○委員

- ・5～6年前までは会員名簿を作っていたが廃止し、個人情報の把握は役員のみとした。班長の連絡先すら非公開としている。

○委員

- ・繋がりを作るのに、隣の方が何の仕事をしているのかという情報すら得られない。
- ・ネットで盛んに交流できているのが個人情報が隠されているからなのであれば、あだ名を付けるなどして個人情報を隠した方が若い世代が気軽に参加できるのかと思った。
- ・以前は地域で事件があるとPTAの必要性をかなり感じていた。
- ・今は時代の流れで消滅していつているが、また必要になるときが来ると思うので、消滅と発生のリズムを研究していただけないかと話を聞いて思った。

○委員

- ・知人から子どもの友達の親にお礼を言いたくても、連絡先が分からないから伝える手段がないと聞いた。
- ・個人情報の保護が繋がりを断ってしまっているところもある。

4 【議題】自治会・町内会支援のあり方について

- ・事務局にて、資料1、資料2、資料3を用いて説明。

○委員長

- ・事務局の説明を受けて、質問や意見をいただきたい。

○委員

- ・委員はそれぞれ自治会に加入しているか。
自身がいた自治会は、コロナ禍やゴミの回収が戸別回収になった際に解散していた。
- ・同じようなタイミングで解散している自治会が多いのではないかと。

○委員

- ・自治会・町内会等活性化補助金を利用し、運営面で大きな助けになっている。
- ・補助金を利用する前は、申請する際に提出する計画書や報告書の作成を負担に思い、敷居が高く感じていた。
- ・補助金で防犯ステッカーの作成・配布や、高齢者向けの特珠詐欺防止の講演会などのイベントを実施し、参加者からも好評だった。

○委員

- ・アンケートでは「若い世代に参加してほしい」「負担が大きい」という声が目立つが、実際に自治会を運営している方の負担や現状の厳しさなどの温度感はどうか。
- ・30～40代は「自治会は面倒くさい」というイメージがある一方で、子どもの頃には楽しい思い出もあり、自治会への良い記憶もあるが、現在は「大変そう」という印象が強まっているように感じる。

○委員

- ・自治会の運営は役員のみで担っており、会員に義務はほとんどない。お願いするのはお祭りの手伝いなどで、それも任意である。
- ・住民の中では「役員にされるのでは」「班長は大変」という固定概念が強く、本来はその固定概念を払拭したいが、なかなか難しい状況である。

○事務局

- ・自治会によって規模や工夫が異なり、負担軽減の努力は進んでいるが「大変そう」というイメージが先行している。
- ・高齢役員のなかに若い世代の方が入ると、価値観の違いからコミュニケーションが難しい場合がある。

○委員

- ・都営住宅で7年間の役員経験があり、当初は子育て世代が中心で運営が円滑だった。入居世代が一斉に高齢化すると、役員も同様に高齢化していくため、自治会の業務が困難になり機能不全に陥りやすい。
- ・都営住宅の自治会には苦情（騒音、違法駐車）が持ち込まれやすく、解決が難しい。
- ・自治会が実施する楽しい活動を増やせていければ、役員の負担感や輪番制の嫌悪感を軽減できるかもしれない。

○副委員長

- ・「役員は大変」というイメージを払拭するために、自治会・町内会という名称は変えられないのか。法律などで定められているのか確認したい。

○事務局

- ・西東京市では、自治会・町内会という名称は義務付けられてない。
- ・自治会・町内会の呼び分けは地域により異なる。

○副委員長

- ・名称を変えるだけでも若い世代が参加しやすくなる可能性があるのでは。
- ・中身は変わらなくても、英語表記などで親しみやすくなるのではないか。
- ・固い名前だと、古い組織のような固定観念やイメージを与えてしまっているのではないか。

○委員

- ・地域でPTAが縮小・解散した事例があり、外部から見ると不安感が強まる。実際には、完全消滅ではなく、名称変更や活動縮小により存在はしているがイベントを委託するなど、活動頻度が減少している。
- ・名称が変わると「解散した」と誤解されることがあるため、名称変更の影響は大きく、良し悪しはある。

○委員

- ・自治会・町内会に入りにくいのは、入口が分かりにくいことが要因のひとつ。
- ・誘わなければ加入しないため、声掛けが必要。

○委員長

- ・境界意識や「外の人」という感覚が障壁になっている。
- ・新規の住民から見ると「どうやって境界線を越えるか」が課題で、誘いがあれば加入する可能性がある。

○事務局

- ・ 次回の開催は、10月を予定。日程はメールにて調整する。

5 閉会